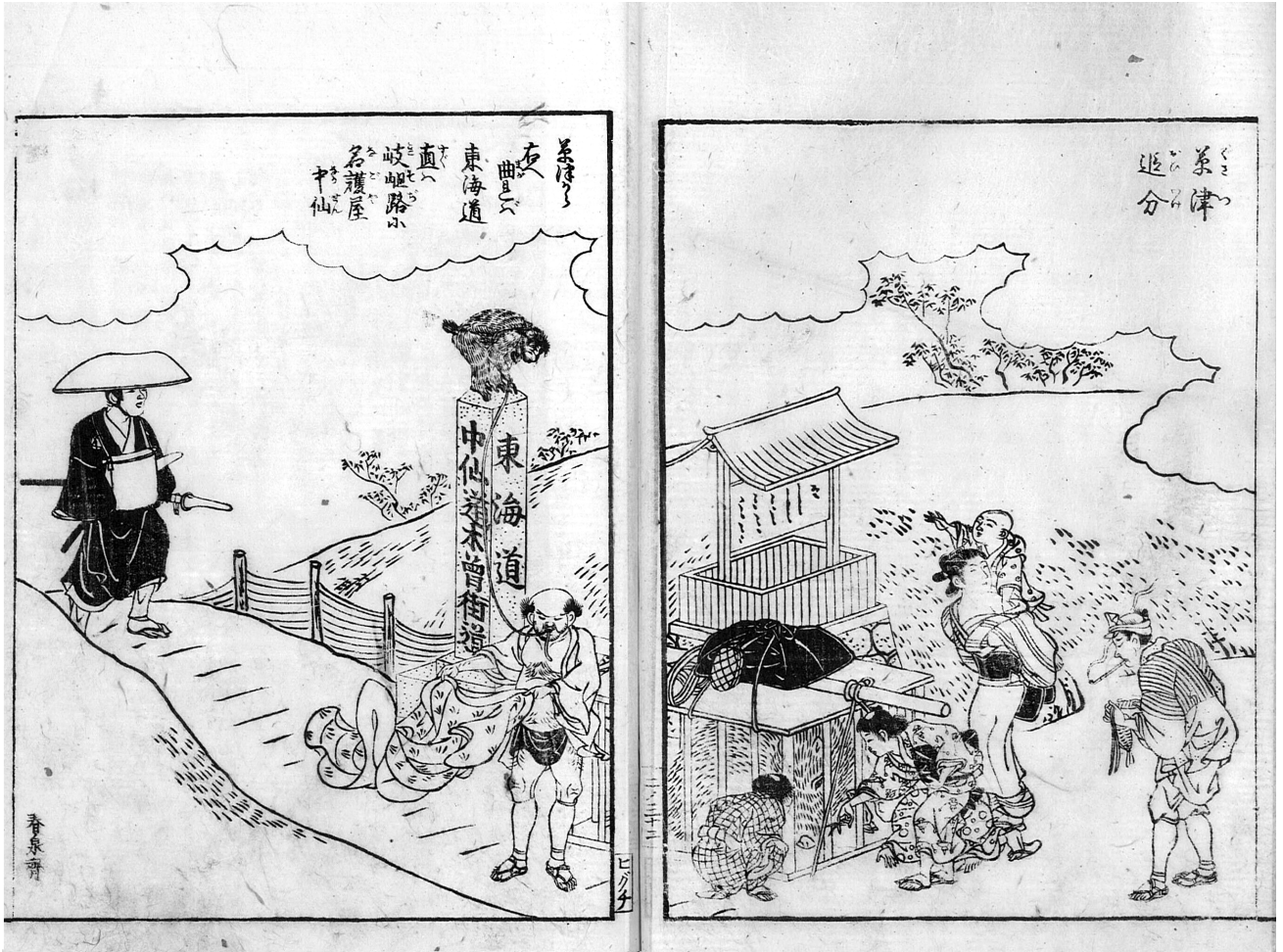


# I

## 街道と生活

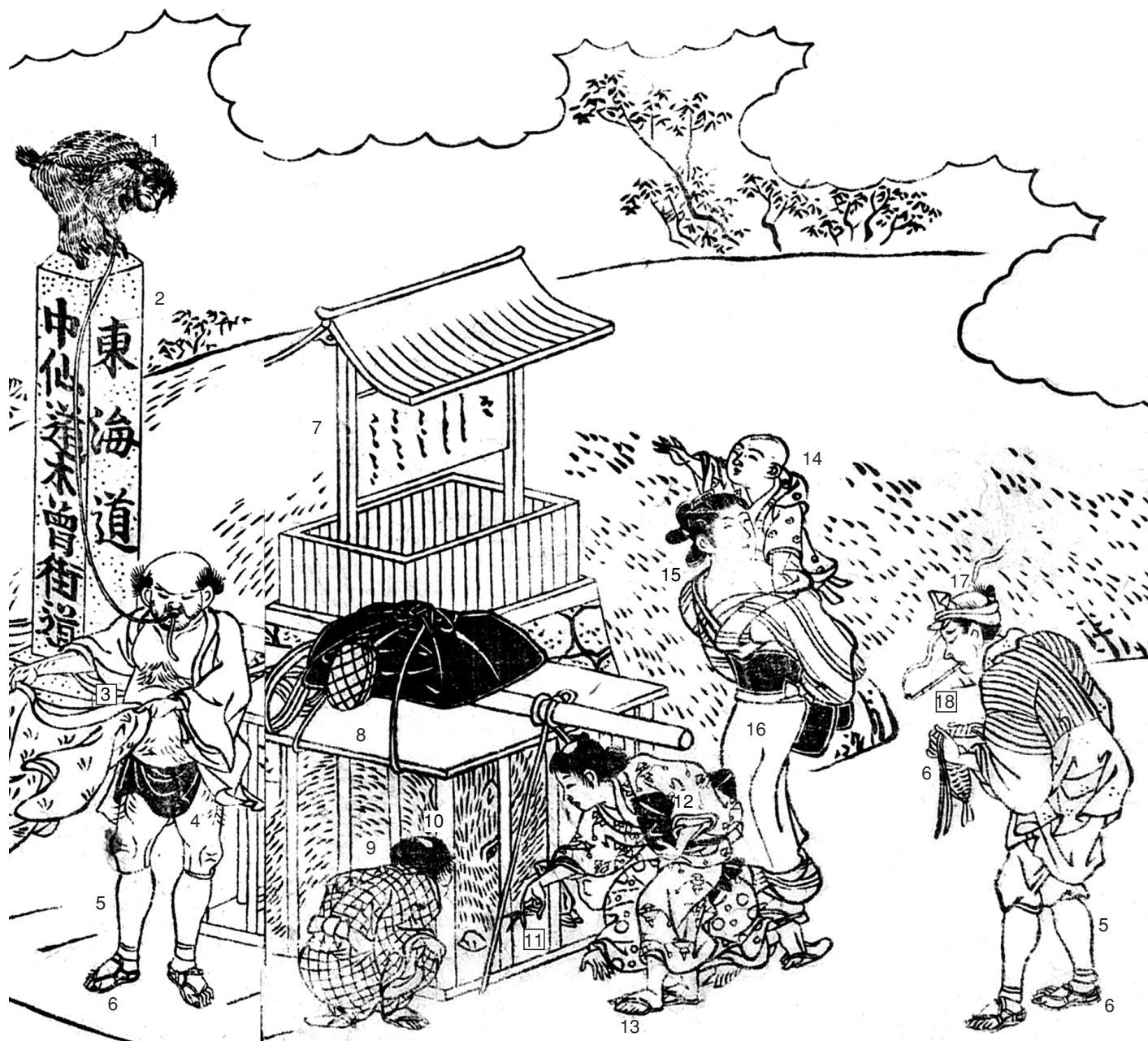


# 1 草津追分

- 1 猿
- 2 道標「東海道・中仙道木曾街道」
- 3 着物をはたく
- 4 越中褌（守貞）
- 5 脚絆
- 6 草鞋
- 7 高札
- 8 檻
- 9 猪
- 10 中剃り（守貞）
- 11 猪をかまう
- 12 風呂敷包み
- 13 草履
- 14 負ぶわれる子
- 15 褌（守貞）
- 16 前垂れ（守貞）
- 17 向う鉢巻
- 18 煙管で煙草を吸う
- 19 笠
- 20 頭陀袋
- 21 柄袋
- 22 ぱっち（守貞）
- 23 草津川の土手
- 24 土留め柵



草津宿（現滋賀県草津市）の北端にある、東海道と中山道が分かれる草津追分の図である。追分のすぐ北側は、天井川である草津川であり、ここから天井川の堤防を登り、水が流れない河原を歩いて北側に越える道が中山道で、道標には「中仙道木曾街道」と彫られている。図は天井川の土手を大きく描いている。土手に沿って東に進むのが東海道である。道標にも「東海道」と書かれている。東海道はここから数百メートル上流に行った地点で草津川を渡る。

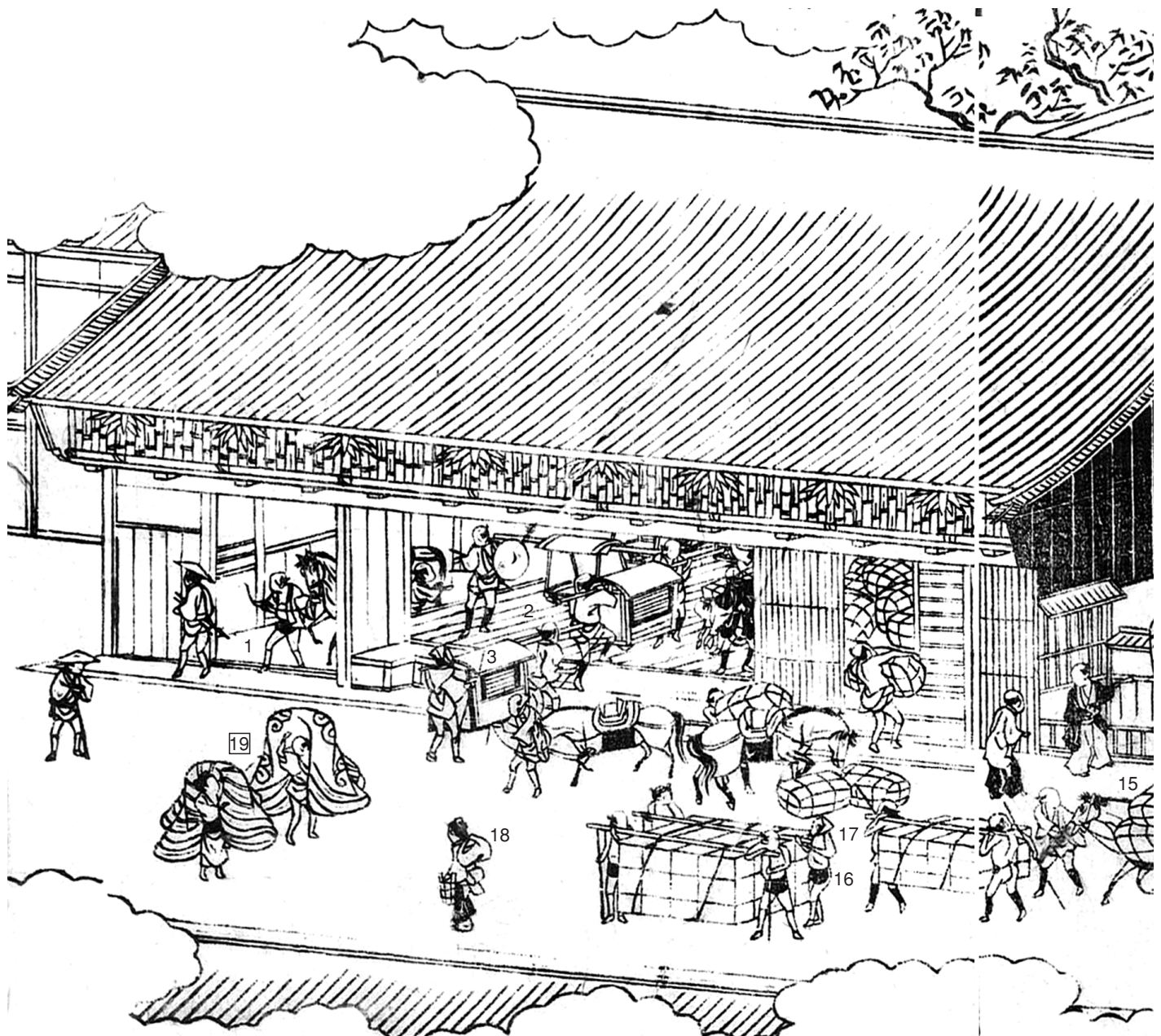


道標と並んで高札場があり、高札が掲げられている。

図の描く情景は、どこからか猿を連れ、また猪を檻に入れて運んできた一行が追分に到着して一時休んでいる様子である。猿を連れた男は、猿をつないだ綱を口でくわえて逃げないようにして、上着を脱いで埃を払っている。猿は道標の上に乗って、人々の動きを見ている。檻に入った猪を物珍しく見ようとして近所の人々が出てきたことを示す。子供達は猪をのぞき込み、手を伸ばして猪に触れようとして

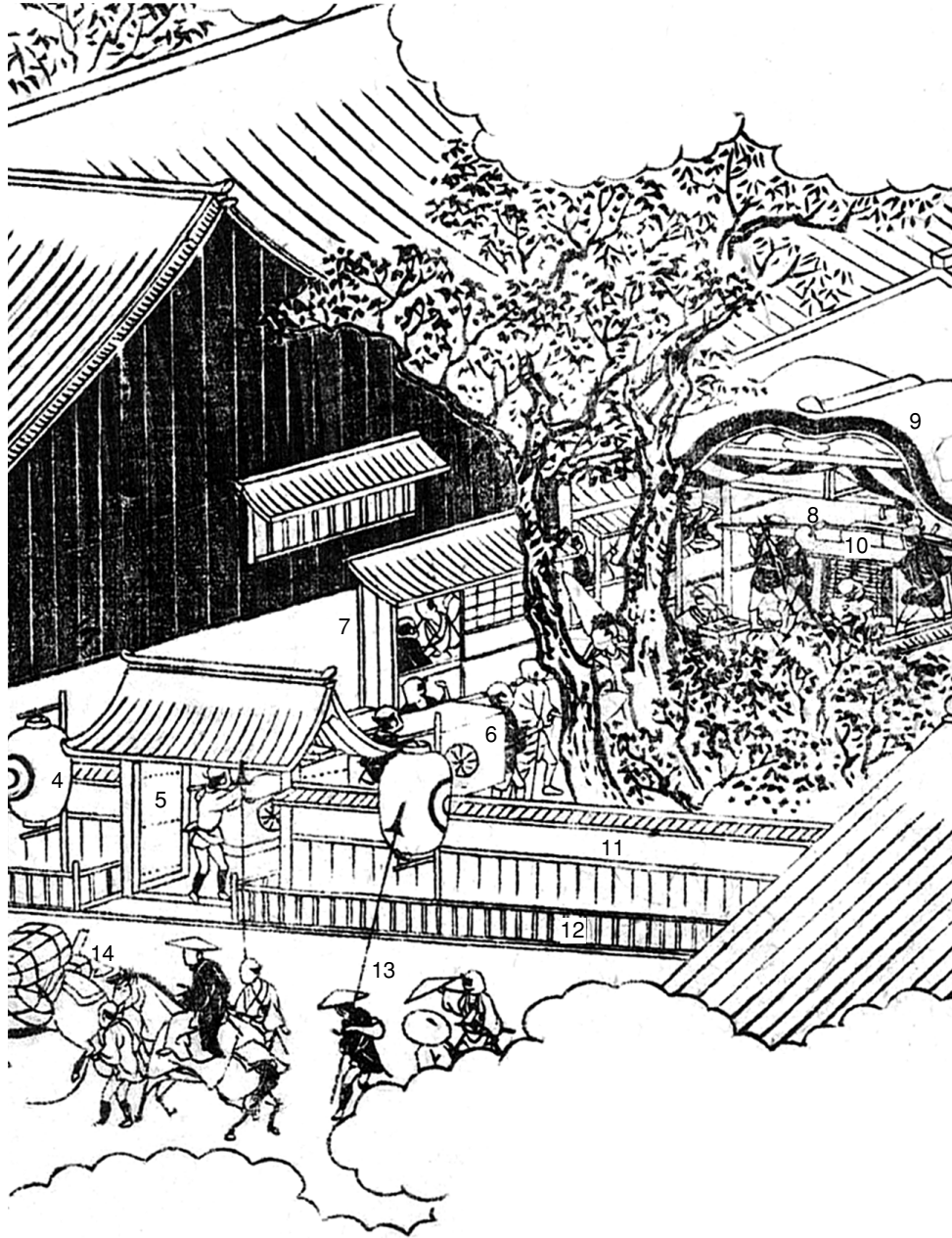
いる。母親におんぶされた子供は道標上の猿に興味を示す。猿と猪はおそらく鈴鹿山中で生け捕りにされ、京都か大坂に運んで売りさばこうとされているのであろう。猿の紐をくわえる男性と草鞋をもって煙草をくゆらす男性の二人がこれを運んでいる人物であろう。(福田)

## 2 坂下宿本陣



伊勢国坂下宿（現三重県亀山市）の本陣の様子を描く。坂下の地名は、鈴鹿山を下りた坂の下に位置することによる。本陣ならびに脇本陣は、大名や勅使、公卿、公用の武家などが宿泊する特別な宿で、一般の旅籠では許されない門や玄関を備え、奥には書院造の「上段の間」が設けられている。通りに面して、荷を運び入れる大板間があり、これに隣接し

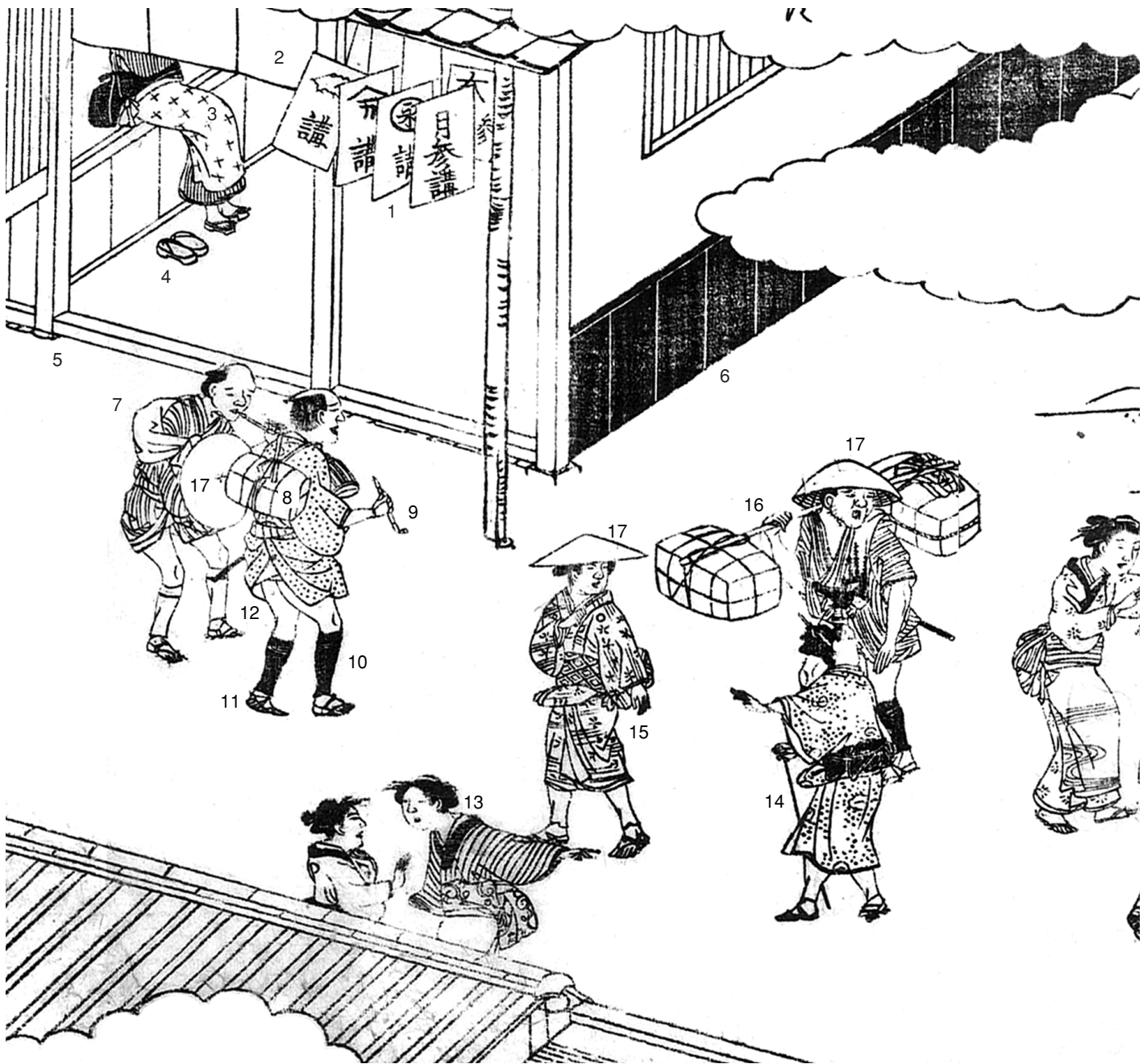
て勝手土間を設けるのが一般的な構造である（これら本陣の構造や名称についての出典は、大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究』による）。坂下宿の本陣は、とくに立派な構えで知られていたらしく、『伊勢参宮名所図会』でも紹介されている。詞書によれば、本陣・脇本陣がそれぞれ大竹・小竹の屋号で呼ばれていたとあり、大屋根の軒下には竹模様の



- 1 土間
- 2 板間
- 3 町駕籠 (守貞)
- 4 高張提灯
- 5 表門
- 6 長持
- 7 番所
- 8 玄関
- 9 唐破風
- 10 駕籠
- 11 築地塀
- 12 柵
- 13 檜
- 14 会符 (膝栗毛)
- 15 本馬 (用心)
- 16 越中禪 (守貞)
- 17 上半身裸
- 18 風呂敷包み
- 19 大布団 (守貞) を運ぶ

彫刻が施されているのが見える。右奥の玄関に駕籠ごと乗りつけた行列の主人は、冠を被り笏を持った姿からみて公家であろうか。中央の大板間に続々と到着する駕籠、4人がかりで運ぶ大きな荷物、大布団を運び入れる人など、特別な旅客の一団が逗留する本陣特有の賑わいを感じられる。(山本)


### 3 宿場の往来



伊勢国関（現三重県亀山市）の宿場での情景を描いたひとこまであろう。ここから参宮道が分岐するため、旅人の中には伊勢参りの者も多い。旅籠の軒先に下げられたまねきは、常連となっている伊勢講社の旗と思われる。軒先に下げておけば、毎年入れ替わる代参者の目にもふれやすく、宿を間違える心配がない。往来で馬子同士がもめている。宿場では

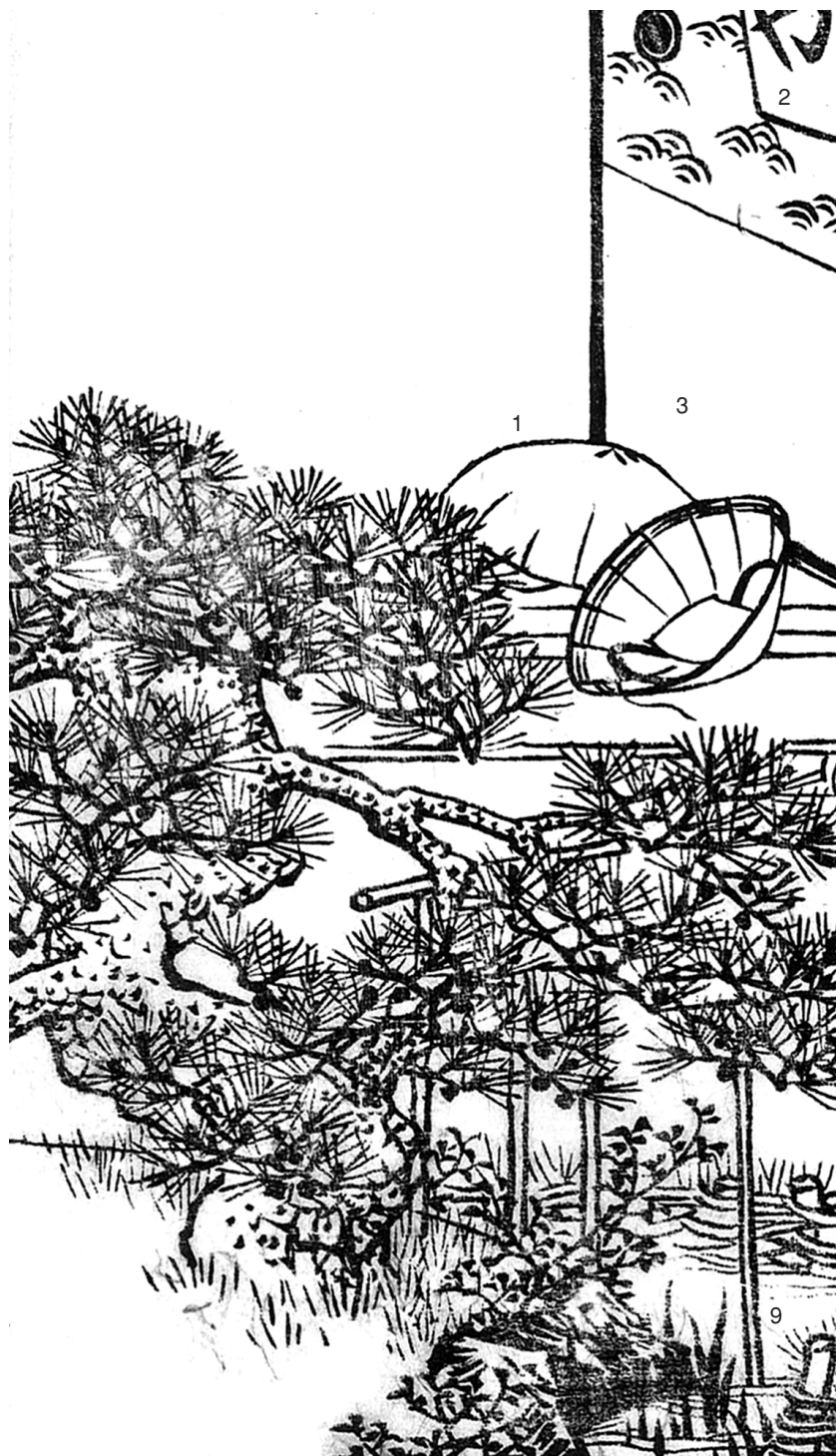
よく見かける光景で、静かなほうがむしろ異様である、と詞書にある。馬子の左側の3人は、女2人に荷持ちの男ひとりという構成である。女性の旅姿は、裾を短くはしより、脚絆に草鞋履きである。女同士による旅の場合、用心のため、たいていひとは荷持ちを兼ねた男が同行した。（山本）



- 1 まねき「月参講」「講」「分講」
- 2 暖簾
- 3 前垂れ(守貞)
- 4 下駄
- 5 旅籠屋
- 6 腰板
- 7 風呂敷包み
- 8 振り分け荷物
- 9 煙管
- 10 脚絆
- 11 草鞋
- 12 尻からげ(嬉遊)
- 13 黒襟
- 14 杖
- 15 おはしより
- 16 両掛け(用心)
- 17 菅笠
- 18 鬣を引っ張る
- 19 鉢巻(膝栗毛)
- 20 両肌脱ぎ
- 21 仲裁する
- 22 明荷
- 23 手綱
- 24 腹掛け
- 25 轡
- 26 鞍

## 4 旅籠の宿入り

- 1 菅笠
- 2 行灯看板（守貞）
- 3 襖
- 4 笠輪（我衣）
- 5 縁
- 6 草履
- 7 草鞋
- 8 松
- 9 池
- 10 行李
- 11 柄袋
- 12 道中差し（用心）
- 13 脚絆
- 14 手拭い
- 15 鉢巻（膝栗毛）
- 16 葛籠（和漢）
- 17 頭陀袋
- 18 羽織
- 19 襷（守貞）
- 20 文庫結び（都風俗化粧伝）
- 21 前垂れ（守貞）
- 22 櫛
- 23 行灯
- 24 火入れ
- 25 灰落し
- 26 煙草盆
- 27 茶碗
- 28 畳



旅籠での宿入りの情景を描く。一般的な旅籠の構造は、表に面した入り口から土間を通ったところに庭があり、これに面して縁が設えられている。旅人はここで草鞋を脱ぎ、足を洗って座敷に上がるのである。縁下に草鞋が雑然と脱ぎ捨ててある。草鞋は一日で履きつぶすのが通常だったのだろう。旅日記

などを見ても、毎日か隔日程度の頻度で草鞋を買い求めている。ここに描かれている旅人は、手前の縁に腰掛けて草鞋を脱いでいる町人風の男と、右端に見える武士。町人風の男と語る鉢巻の男と、手前に見える男の二人は、駕籠かきか荷持ちの人足であろう。奥の座敷には寝転んでくつろぐ旅人と、そこ

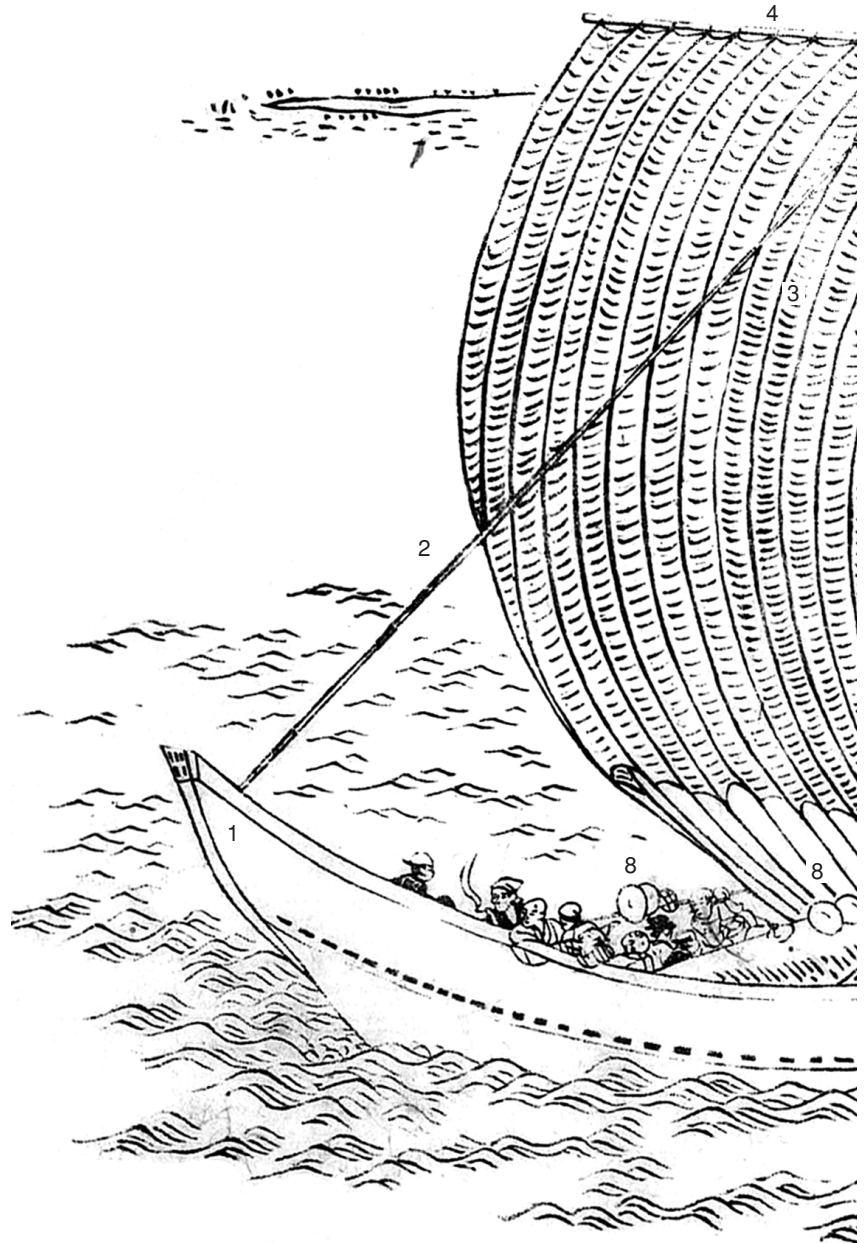




へたばこ盆と行灯を運ぶ女中の姿がみえる。詞書には「関に泊て招嫖<sup>おじやれ</sup>を買ふ」と題した胴脈なる人物の漢詩風の戯れ歌が紹介されている。招嫖とは飯盛女のこと。「地藏も及ばず招嫖<sup>おじやれ</sup>の栄<sup>よそほひ</sup>」「昨夜の幻妻今曉見れば、目珠飛び出でて頬鬚<sup>つらかに</sup>の如し」などと垢抜けない飯盛女の風情が記されている。(山本)

## 5 七里の渡し

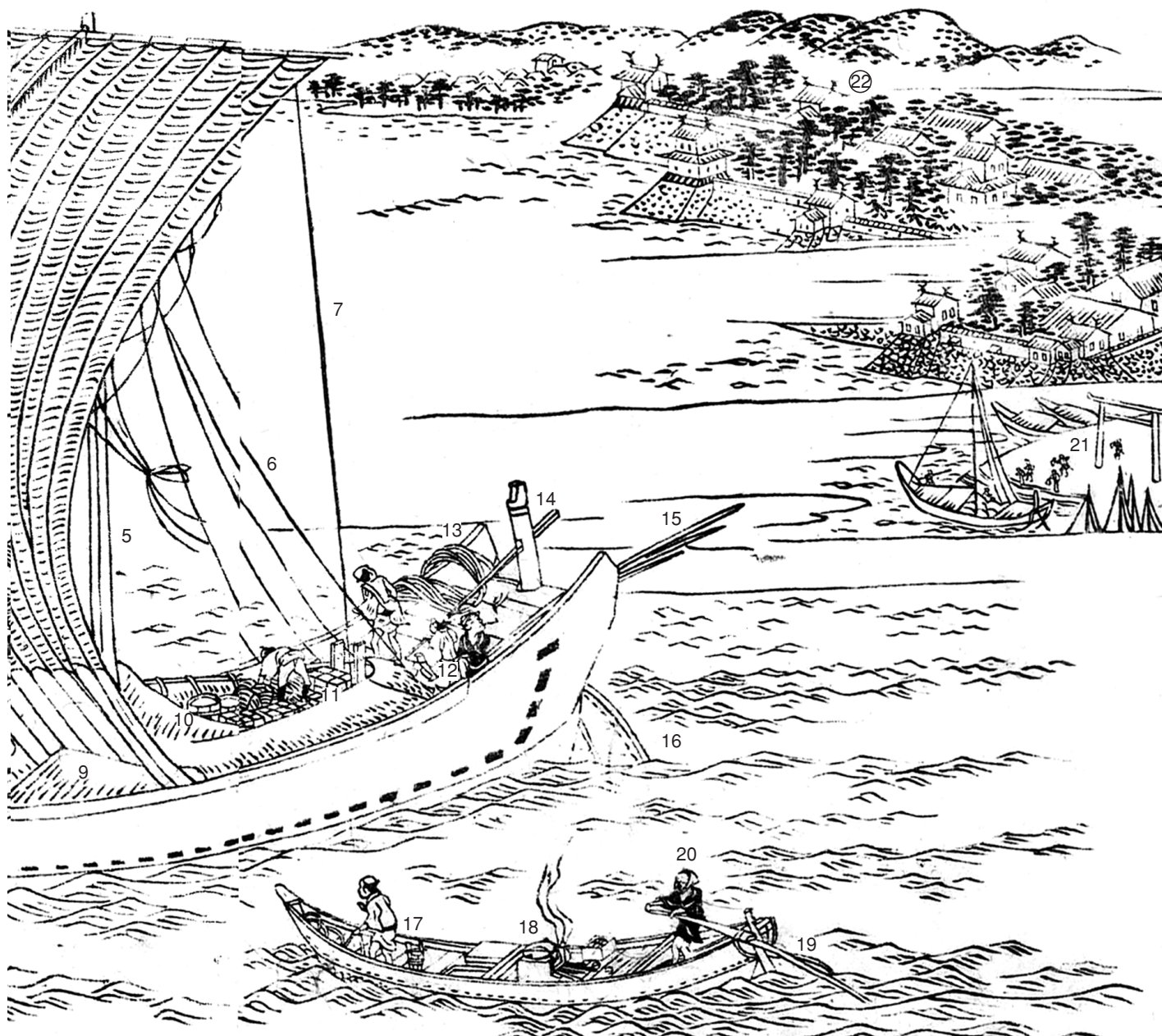
- 1 水押ほすき
- 2 篙ほすき
- 3 帆
- 4 帆桁
- 5 帆柱
- 6 身繩
- 7 手繩
- 8 笠
- 9 苫（膝栗毛）
- 10 樽
- 11 荷
- 12 檣（守貞）
- 13 纜（和漢）
- 14 柁柄（和漢）
- 15 棹
- 16 舵
- 17 角樽（守貞）
- 18 竈（守貞）
- 19 櫓
- 20 頬被り（膝栗毛）
- 21 一の鳥居
- ㊸ 桑名城



尾張国宮（現名古屋市熱田区）から伊勢国桑名（現三重県桑名市）に渡る、通称「七里の渡」とよばれた渡船のようすを描く。別名「間遠の渡」ともいい、本文によれば、天武天皇が大友皇子に追われ尾濃へと逃れる際、渡船の着岸が遅いことを「間遠なり」と言ったという故事による。風が強く波が荒い時は、尾張の佐屋から桑名まで、海上三里を渡る航路も利用された。七里の渡の渡船料については、『早見道中記』（文化2年）に、「のり合一人四十五文、のり物一てうは六人まへ、駕四人前、荷一駄三

人前、のり下二人まへ、はさみ箱一人前」と記されていて、絵の様子からも人と荷物を混載する乗り合い船であったことがわかる（中村幸彦校注『東海道中膝栗毛』新編日本古典文学全集81所収、1995）。

また『久波奈名所図会』（文化元年）ではこの海路に就航する船を「宮廻船」とよび、3人水主の34人乗り、4人水主の40人乗り、5人水主の47人乗り、6人水主の53人乗りと、4種類あったことが記されている。この絵では、船尾付近に4人の水主らしき人物が見えることから、40人乗りであろうか。



船首付近に見えるのが乗客で、たばこをくゆらす者や船べりに腕をのせてくつろぐ者、女性客の姿も見える。天候が良ければ波も穏やかで、のどかな船旅であったのだろう。船の造りも比較的簡素で、帆柱の先端から水押にかけて張られた筈緒と、その反対側に張られた身繩、手繩で一本の帆を支えている。棹が見えるので、帆走と棹を用いる操船とが併用されていたことがわかる。渡船の脇に漕ぎ寄る小舟は、乗船客相手の煮売り船で、『東海道中膝栗毛』では「あきなひ舟」と称する。同書には、「酒のまつせん

かいな。めいぶつかばやきのやきたて、だんごよいかな。ならづけでめしくはつせんかいな」などと客に勧める描写があり、街道の茶店同様にさまざまな飲食を旅人に提供する装置であったことがわかる。絵の右手後方に見えるのは、上陸地である桑名の湊で、参宮道の入り口を示す一の鳥居と、海上に突き出すようにそびえる桑名城が描かれる。旅人にとって、海上から望むこれらの情景が印象深かったことをうかがわせる。（山本）

# 6 秋葉山中の茶店





- 1 息杖
- 2 草鞋
- 3 頬被り
- 4 片膝立て
- 5 山袴
- 6 鉄炮
- 7 煙管
- 8 笈おひ
- 9 菅笠
- 10 天狗面「奉納」
- 11 片肌脱ぎ
- 12 釜
- 13 炉
- 14 水桶

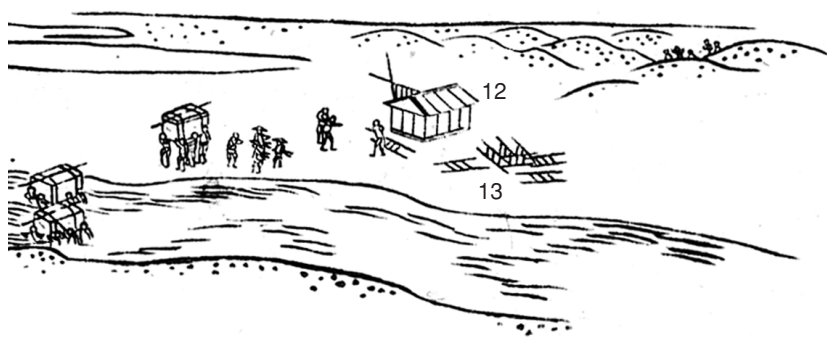
三河国鳳来寺山（現愛知県新城市）から遠州秋葉（現静岡県浜松市天竜区）へいたる山中の道は厳しい8里余りの道のりであった。その途中にある峠の茶屋の様子を描いている。簡単なアンペラ風の庇をつけた下に炉が設けられ、湯を沸かし、茶を給している。その上には草鞋が束ねて吊してあり、旅人の求めに応じるための商品であろう。縁台には地元の猟師と思われる人物が鉄炮を携えてすわり、旅人と談笑している。2人とも片足を縁台に上げ、片足を地面につけている。これがくつろいだ姿なのであろう。また遠くから秋葉山へ天狗面の額を奉納しようとして運んできた男が休んでいる。大切に運んできた天狗面を確認し、包み直している。彼の背負って運んでいる笈には、大部分が笠に隠れて見えないが、おそらく「秋葉権現」と「金毘羅」と記されているのであろう。そして、道路にはいかにも重そうな荷物を高く積み上げて担いで歩く女性の強力を描いている。詞書によれば、「大野といふ所の女は旅人の荷を背負って坂路をやすやすとゆききして世わたりする」と解説している。大野とは現在の新城市大野のことかと思われるが、はっきりしない。（福田）

## 7 大井川の渡し



有名な大井川の渡しの光景を描く。本書の作者たちは大井川の渡しに大いに注目したらしく、大井川の渡しの場面を4ページにわたって挿入している。上に掲げた横長の絵はそれを接続させてパノラマにしたものである。下の絵はそのうちの大井川の左岸、すなわち東側の様相を示している。島田（現静岡県島田市）から大井川を渡る場面となる。川の土手際

に川会所があり、旅人はここで渡河のための手続きをする。川越えの賃金は、川水の量によって毎日決められる変動制で、その日の額で川札というチケットを購入した。川札1枚で人足1人、金額は80文とか90文であった。輦台を用いる場合は、その使用料として台札も購入する必要がある。川札と台札は同じ札である。渡河方法によって必要な人足が異



- ① 大井川
- 2 輦台
- 3 駕籠
- 4 四方手すり四本棒輦台（島田市史）
- 5 人足
- 6 並台（島田市史）
- ⑦ 肩車をする
- 8 槍
- 9 本馬
- 10 肩車
- 11 馬越え
- 12 川会所
- 13 輦台の枠

なり、その必要人数分の川札と台札を購入し、それを人足に手渡して渡してもらおう。図には様々な渡河方法が描かれている。中洲の中央部には、駕籠をのせた四方手すり四本棒の輦台を大勢の人足が担い、並台と呼ばれる小さな一人ないし二人のりの輦台を5、6人の人足が担っている様子、肩車をしようとしている人足、また荷物を運ぶ種々の方法も描かれ

ている。大井川の渡しの具体的様相を描き出している興味深い図である。ちなみに嘉永3年（1850）の記録によれば、一人乗りの並台で台札を含めて川札6枚、二人乗り並台は8枚、そして四方手すり二本棒だと川札36枚、四方手すり四本棒になると川札52枚であった（『島田市史』中）。（福田）

## 8 大井川を渡る大名行列



- 1 大籠出 (地方凡例録)
- 2 蛇籠
- 3 瘤出 (御普請一件)
- 4 大聖牛
- 5 飼葉桶
- 6 馬
- 7 槍
- 8 弓
- 9 旗
- 10 四方手すり四本棒輦台 (島田市史)
- 11 肩車
- 12 両掛け (用心)
- 13 二人乗りの並台 (島田市史)
- 14 荷を頭上にかかげて渡る
- 15 荷を担いで渡る
- 16 殿の到着を待つ家来たち
- 17 荷を馬に付ける
- 18 待機する槍持ち





大井川の渡しの様相を近景で描いたもので、大井川右岸の金谷（現静岡県島田市）側を描いている。大名行列一行が今まさに流れを渡りきって岸に到着しようとしたところを示している。四方手すり四本棒の輦台に駕籠が載せられていて、それを大勢の人足が担って運んでいる。駕籠の主は、駕籠のなかに座ったまま川を渡る。その背後にも駕籠を輦台に載せて運ぶ様相が示されている。家来たちはすでに岸に到着し、岸边に控えて、殿の到着を待っている。荷物もすでに岸に上げられ、ここから再び行列を組

んで進むための準備に余念がないことがうかがわれる。なお、大名が用いる輦台は、それぞれが用意して持参するもので、普通は本陣に預けてあった。

到着地点の背後には護岸装置が見られる。堤から流れに向かって突き出された、蛇籠を積み重ねたおおかごだし大籠出と、そこからさらに流れに向かって出されたこぶだし瘤出は、増水したときの流れを弱めるためのものである。瘤出は大きな木棒であるおおひじりうし大聖牛で押さえられている（「御普請一件」『日本思想大系』62所収）。  
（福田）

## 9 安倍川の渡し



駿府（現静岡市）の西側を流れる安倍川の渡河の様相を描く。安倍川も大井川と同様に橋が架けられておらず、輦台や肩車で渡っていた。輦台には、一台に2人が載っている。それを4人で担っている。流れが急でなく、水深も浅く、しかも川幅がそれほどないので可能なのであろう。情景としては大井川ほどの大きな川ではないので、人足ものんびりと構えている様子が見えがえる。

土手をのぼって進む街道には、子供の手を引いた女性が描かれるが、特に荷物など持っておらず、手拭いを頭に掛けている身軽な様相なので、旅人ではなく、地元の女性が子供を連れて安倍川に散歩にでも来たのであろうか。その女性に後から声を掛けている女性は、背中に大きな風呂敷包みを担いでおり、何か商売をしているのか、あるいはどこかへ品物を運ぶのであろう。前行く親子連れの女性に何かを問

- |             |                          |
|-------------|--------------------------|
| ① 安倍川       | 14 草鞋                    |
| 2 肩車        | 15 越中禪 (守貞)              |
| 3 二人乗り輦台    | 16 煙管                    |
| ④ 肩車から客を降ろす | 17 頬被り                   |
| 5 人足        | 18 駕籠                    |
| 6 輦台        | 19 手綱                    |
| ⑦ 寝そべる      | 20 腹掛け                   |
| ⑧ 風呂敷包みを背負う | 21 轡 <small>からじり</small> |
| ⑨ 子供の手を引く   | ⑳ 軽尻                     |
| ⑩ 手拭いを被る    | 23 尻掛け                   |
| 11 息杖       | 24 捻り鉢巻                  |
| 12 煙草入れ     | 25 両掛け (用心)              |
| 13 脚絆       | 26 道中差し                  |



いかけている様子である。

さらに東海道を往来する人々を描くが、下図の中央左部分には相撲取りと思われる巨漢を乗せた駕籠とその駕籠かき4人、右側には客を乗せた馬とその手綱を持ち馬を促す馬子、そしてその後には荷物を担いで運ぶ2人の人足が描かれている。相撲取りを乗せた駕籠は前に1人、後に2人で担ぎ、1人が交代要員として付き添っている。(福田)

# 10 富士川の渡船



- |         |          |
|---------|----------|
| 1 富士山   | 9 渡し船    |
| 2 「新町村」 | 10 「水神森」 |
| 3 尺木垣   | 11 鳥居    |
| 4 川会所   | 12 入母屋   |
| 5 蛇籠    | 13 「松岡村」 |
| ⑥ 富士川   | 14 駕籠    |
| 7 曳き綱   | 15 舟溜まり  |
| 8 高瀬舟   |          |

富士川を渡る東海道を描いている。背後には富士山がそびえている。橋が架けられていない川としては大井川が有名であるが、大井川から東の大きな川には橋がなく、大井川同様に流れのなかを渡る方法をとっていた。富士川も同じであった。ただし、富士川は大井川等に比べて流れが急であったためであろうか、専ら舟による渡河が行われていた。渡船場は流れの変化に伴って変わったが、近世後期には、東岸が松岡村水神森下（現富士市松岡）、西岸が岩淵村舟山（現岩淵町舟山）であった。この図もそれを描いている。松岡側には水神森があり、流路安定を祈願して水神がまつられている。

また、流路の少し上流部では、舟の帆柱に綱を縛り、それを岸に沿って3人の人物が曳いている。富士川舟運では、甲州から下ってきた舟は、帰りには船頭たちが舟に綱をつけて岸を歩いて曳く方式で上流に向かった。甲州の中心的な河岸である鰍沢（現山梨県南巨摩郡鰍沢町）から約70キロメートルの距離を半日ほどかけて下り、帰途は鰍沢まで4日、増水したときは7日かかったという（『山梨県史』民俗編）。（福田）

